

目標指標例について

＜＜討議用参考資料＞＞

平成22年3月26日
知的財産戦略推進事務局

本資料は、資料1『「知的財産推進計画2010(仮称)」骨子に盛り込むべき事項について』において記載している目標指標例を議論するにあたり、その参考資料として作成したもの。

資料1の構成に従って、【目標指標例】ごとに関連する情報、考え方などを「《参考》」として整理した。

1. 企業の事業活動における戦略的な国際標準化、知的財産を有効なツールとして活用することにより、グローバルな規模で事業に成功する。

- (1) 技術動向、市場動向、我が国の特長を勘案し、特定戦略分野(例えば:スマートグリッド、水関連技術)における標準化ロードマップを含む知的財産マネジメントを核とした競争力強化戦略を策定・実行するとともに、その基盤となる施策を充実する。

【目標指標例】

- (イ) 特定戦略分野において、標準化ロードマップを含む知的財産マネジメントを核とした競争力強化戦略を策定・実行する

《参考》

競争力強化戦略を策定・実行されたか否かを定性的に評価することが適当。

- (ロ) 高い交渉スキルを有する国際標準化活動の専門家を育成する(400人)

《参考》

「高い交渉スキル」という基準の明確化は難しいが、国際会議の取り纏めを行う議長や主査のポストを任せられるレベルを想定。

なお、日本の ISO/IEC の国際議長・国際幹事は約 100 人、ワーキンググループの主査は約 100 人。(経産省、「ISO/IEC の国内対応体制の概要」、平成 20 年 3 月 4 日)

(ハ) 国際標準機関における幹事国引受け件数を増加させる (150 件)

《参考》

○ ISO/IEC (主要国)

		米	独	英	仏	日	中	韓	全幹事国数
ISO	件数	128	132	77	75	59	24	11	740
	割合	17.3%	17.8%	10.4%	10.1%	8.0%	3.2%	1.5%	100%
IEC	件数	23	32	20	24	15	5	3	173
	割合	13.3%	18.5%	11.6%	13.9%	8.7%	2.9%	1.7%	100%
名目 GDP(構成比)		25.2%	6.1%	5.1%	4.7%	8.0%	6.2%	1.8%	

※ ISO/IEC 件数：2008 年末

※ 名目 GDP(構成比)：国民経済計算に基づく (2007 年値)

(2) 「安全・安心」を普及する。

【目標指標例】

(イ) 環境保護や「安全・安心」実現の観点から、適切な評価方法や規格・基準等の国際標準を獲得する

《参考》

環境保護や「安全・安心」実現に資する国際標準が獲得できたか否かを評価すべきではないか。

(3) 低コストかつ効率的にグローバルな権利取得と保護を可能とする国際知財システムを構築する。

【目標指標例】

(イ) 特許の海外出願比率 (日本特許庁への出願のうち、外国にも

出願された件数の比率) を高める (24%→35%)

《参考》

日本のグローバル出願率は24% (2007年出願に基づくデータ)。米国は51%、欧州は62% (いずれも2006年出願に基づくデータ)。

(ロ) 特許審査結果の実質的な相互承認に向け着実に前進する
(例: 日米欧韓中の五大特許庁間における共通の特許審査基盤を整備、海外特許出願に対する特許審査ハイウェイ (PPH) 利用可能率を約70%→90%)

《参考》

実質的な相互承認に向けた、具体的取組の進捗状況を定性的に評価することが適当。また、2008年ベースで、PPH利用可能率は約70% (日本人により海外出願は現在19万件。そのうち、日本とPPHを実施している12か国・機関への出願が13万件)。

なお、他国における特許審査結果に依存する数値目標を設定することは不適切。

(ハ) 東アジア地域における植物品種保護制度の共通基盤を整備する
(例: UPOV91年条約への新規加盟国を得る、審査方法の共通化、審査データの相互利用開始)

《参考》

植物品種保護の共通基盤整備に関する具体的取組の進捗状況を定性的に評価することが適当。

(二) 主要国・地域がACTAの加盟国となる

《参考》

知財保護の志の高い国・地域が交渉に参加。現時点では、日本、米国、EU、スイス、カナダ、韓国、メキシコ、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランド、モロッコ。条約締結後、加盟国拡大に向けた働き掛けの予定。

(ホ) 国内外の模倣品・海賊版により被害を受ける日本企業の割合
(模倣被害率) を、被害の撲滅に向け、大幅に引き下げる (例: 日本企業の模倣被害率を24%→12%)

《参考》

1997年度の11.5%から上昇し、2002年度の28.8%をピークに下

降、その後 20～25%で高止まり（最新の 2007 年度が 24%）。

なお、模倣被害率とは、産業財産権出願数上位 8,000 社に対するアンケート調査において、模倣被害を認知し「模倣被害あり」と回答した企業の割合。模倣被害とは、知的財産権（商標権、意匠権、特許権、著作権等）を侵害する製品・サービスの製造・販売等による被害のこと。

2. 我が国の優れた技術を活かした世界に通用する新規事業を創出する。

- (1) ベンチャー・中小企業や地域における知的財産の活用を促進し、国内のみならず世界でも通用する事業を生み出す。

【目標指標例】

- (イ) ベンチャー・中小企業における特許制度利用者の裾野を広げる（新たに特許出願をしたベンチャー・中小企業数（累計）：約 2.5 万社）

《参考》

2008 年度に特許出願をしたベンチャー・中小企業数は 1.2 万社。

- (ロ) ベンチャー・中小企業による海外出願件数を増やす（約 0.8 万件→1.2 万件以上）

《参考》

ベンチャー・中小企業による海外出願数は約 0.8 万件（2007 年の出願に基づく推計値）。過去 4 年間で約 7%の伸び。

- (ハ) ノウハウ秘匿を含めた知的財産マネジメントをベンチャー・中小企業経営に浸透させる（例：各種アンケートから把握される浸透度合いの向上）

《参考》

各種アンケートを参照しつつ、総合的に評価することが適当。

(2) 産学官共創力を世界最高水準に引き上げる。

【目標指標例】

(イ) 産学官が大学や公的研究機関の知を活用し事業化へ向けて共創する場を構築する

《参考》

世界には、産業界のコミットメント（50%以上の収入を産業界から得る）を得られた拠点として、IMEC（ベルギー）、MINATEC（フランス）がある。

(ロ) 企業から国内大学や公的研究機関へ支出する研究費を増加させる（約1000億円→1500億円）

《参考》

統計上、日本の企業研究費（金額）の水準は米国の56%程度であるが、企業から大学の支出はこれに劣り、米国（約3000億円）の36%程度。

(ハ) 大学や公的機関研究費に占める外国資金の割合を増加させる（それぞれ0.04%、0.4%→1%）

《参考》

欧州では、3～8%の水準。

(3) オープン・イノベーションへの対応を含め、イノベーションを加速するインフラを整備する。

【目標指標例】

(イ) オープン・イノベーションに対応した知的財産制度を構築する（例：登録対抗制度、特許を受ける権利への質権設定に関する検討の有無、検討結果に応じた必要な措置）

《参考》

制度見直しの議論、法改正の進捗状況について定性的に評価することが適当。

(ロ) 権利の安定性を向上させる (例：ダブルトラックや再審の問題に関する検討の有無、検討結果に応じた必要な措置)

《参考》

権利の安定性向上に向けた取組の進捗状況を総合的に評価することが適当。

なお、特許庁と裁判所との齟齬の程度を数値目標として設定することは不適切。

(ハ) 特許審査順番待ち期間を世界トップクラスに短縮する (2013年に審査順番待ち期間を11か月)

《参考》

欧州特許庁：22.8か月、米国特許商標庁：26.7か月(2007年)。

2008年に審査順番待ち期間を29か月にとどめるとの中間目標を達成(28.5か月)。

また、2008年度には、2004年度以降はじめて一次審査件数が審査請求件数を上回り、審査順番待ち件数が減少傾向へ(一次審査件数：34.8万件、審査請求件数：31.5万件)。